

開放平飼いの採卵鶏農場で発生したロイコチトゾーン症：岡山県津山家保 三柳和志、黒岩恵

令和7年7月末に、開放平飼いの採卵鶏農場（令和6年10月新規飼養開始・約650羽飼養）において、死亡羽数の増加と産卵率の低下の報告により、立入検査と病性鑑定を実施。沈鬱・肉冠退色・緑色便の他、貧血・赤血球内のメロゾイトに加え、脾臓の著しい出血性病変を認めたため、ロイコチトゾーン症と診断。当日中に畜主に防虫剤によるニワトリヌカカの防除を指示し、翌日には防虫剤を散布したため、状況は速やかに終息。結果として、死亡羽数は30羽、産卵率は最低26%、出荷卵率は最低20%まで推移しており、組織検査では、全身の臓器に第2代シizontの形成と肉芽腫性炎を認める重度寄生と確認。原因として、農場にとっては飼養開始から初めての夏季であったことに加え、ニワトリヌカカが発生・吸血しやすい環境（鶏舎直近の水田・鶏舎内に送風機がない）が考えられる。引き続き、同症の対策と飼養衛生管理基準について、情報共有と指導を続けていく予定。